中国人留学生を撮り続けたディレクター、渾身のシリーズ第6弾!!

上海、東京、NYを結ぶ家族の絆

涙と勇気の〝二都物語〟

金曜プレステージ　芸術祭参加作品
泣きながら生きて
あさって3日　フジ系・夜9時

「日本にいる中国人留学生の悩み、苦しみ、希望を本土の人たちに伝えたいんです。記録だけでも残しておきたいので、撮影機材を貸してもらえませんか」

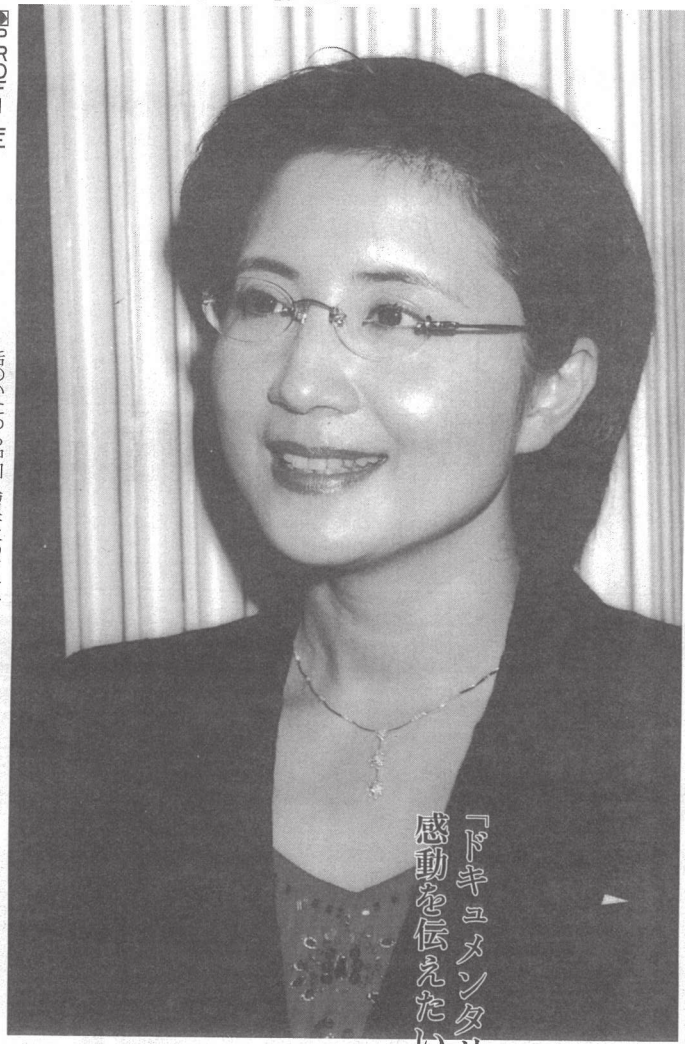
日本の商社に勤めるOLだった張麗玲さんが、突き動かされるような気持ちでフジテレビの横山隆晴プロデューサーのもとを訪ねたのは95年の暮れのことだった。以来、日本で生きる中国人留学生を追い続けてきた。

「小さな留学生」を皮切りに、日中で大反響を呼んだドキュメンタリーシリーズ。その第6弾「泣きながら生きて」が、あさっての金曜プレステージで放送される。

3日放送の金曜プレステージ　芸術祭参加作品
「泣きながら生きて」（フジ系・夜9時）のディレクター

張麗玲

Chou Reirei



カメラ／新開雅哉

「ドキュメンタリー制作は、これが最後に…感動を伝えたい気持ちは変わりませんが」

◆PROFILE
ちょう・れいれい　1967年、中国・浙江省生まれ。89年に来日し、95年に東京学芸大学大学院修了。同年大倉商事入社。OL生活のかたわら中国人留学生のドキュメンタリー制作を始める。00年5月の第1作「小さな留学生」を皮切りに「若者たち」「私の太陽」がフジテレビで放送され、お茶の間に感動と共感を巻き起こした。02年には張麗玲自身がドキュメンタリーを撮影する姿を7年間追い続けた記録「中国からの贈りもの」が放送され、新たな話題を呼んだ。

クローズアップ2006

父（中国人留学生）・母、娘の10年を追い続けて

初対面から回し続けた60分テープなんと500本超

主役は、丁尚彪（ディンシャンビョウ）さん。日本語学校で学んだ後、日本の大学に進学することをめざして89年、妻と一人娘を上海に残したまま単身日本にやってきた。当時35歳。多大な借金を背負っての来日だった。だが、用意されていた日本語学校は、北海道の阿寒町にあった。働いて借金を返しながら勉強をしていくつもりだった丁さんにとっては誤算だった。阿寒町を脱出し、東京の日本語学校に再入学。だが、入国管理局は〝阿寒脱出者〟にビザの更新を認めない。不法滞在者になった丁さんだが、借金は返さなければならない。早朝から深夜まで働きづめの毎日。そして妻子への送金。

張さんがそんな丁さんと出会ったのは、丁さん来日7年目の春だった。

「取材をさせてください」と交渉している最中から、もうビデオを回していました（笑い）。そのまま家について行って。それがいつもの私のやり方なんですけれど」

都電沿いの木造アパート。壁には娘の琳（リン）さんの写真が貼ってあった。琳さんは医者になることを志望していた。

翌年2月、東京で働く丁さんの様子を撮影したVTRを持参して、家族がいる上海へ。8年ぶりに見る夫の姿、父の姿に母娘は声を上げて泣いた。

それから半年後。琳さんは大学に入学するためニューヨークに向かう。途中、東京で24時間限定のトランジット。その24時間を使って、8年ぶりの父娘対面。別れたとき小学生だった娘は16歳になっていた…。

「泣きながら生きて」は、上海、東京、ニューヨーク…3カ所に散っていった3人家族の10年間にわたる〝壮絶な三都物語〟だ。初対面から回し続けてきたテープは60分テープで500本を超えていた。

「この番組は中国で放送されたシリーズの中でいちばん反響がありました。涙を誘ったということもありますが、娘のためにそこまで親が犠牲になる必要があるのかという議論もありました。賛否はあると思いますけれど、やはり丁さんはすごい人だなと思います。人生に絶望している人、現状にちょっぴり不満を持ってる人は、きっと勇気をもらえるはずです」

張さんは放送事業を中心にさまざまな事業を展開する会社の社長という顔も併せ持っている。

「社員は二十数名ですけれど、株主や応援者が日中にたくさんいて、責任がものすごく重いんです。時間と労力のかかるドキュメンタリー制作は、これが最後になるでしょうね。感動を受けてそれを伝えたいという気持ちに変わりはありませんが、将来的には別の形でものを作っていければと。たとえば？　ウーン、夢物語ですけど、ドラマとか映画とか」

張さんが夢物語で終わらせるなんてないと思うけれど…。　（せ）